

(大正8年5月)

陸軍中將 佐藤 鋼次郎

編集委員長…過去の偕行記事の中から、大正期に多くの読者に高評価されていた佐藤中將の『隨感隨録』を紹介する。軍縮が叫ばれる大正期の記事であるが、部隊における指揮と民主主義の問題は、現在の自衛隊にも通じる問題である。

なお、一部現代用語に編集させて頂いた。

## ●時代風潮の不理解

最近、1年志願兵の服役を終わった者の話に、ある聯隊長が部下に訓示した言によると、「デモクラシーなるものを全く無政党や過激派などと間違えていて非常に危険視している」と、その無知識を笑っていた。私がある将校に「デモクラシーとは何か」と問うてみたら、「よくわからないが、何でも破壊主義のようなものと思っている」と答えた。多くの将校の中には、古い思想を懐かしんでいて、デモクラシーの匂いがするものは、反逆人の如く思っている人もいないとは言えない。

過去50年来、欧米を風靡したデモク

ラシーの思想は、今や滔々として世界各地に広まっていった。洪水の如く、狂乱の如く猛然として襲つて来つた。この大勢に対して、頑なにこれに反抗するのも無益である。このような時勢に対処する策としては、大勢に順応して害のない方向に善導するしかない。いたずらにこれを押さえ付けるのは有害である。鉄瓶の蓋を密閉して、そのまま沸騰させれば、遂に鉄瓶が破壊するしかない。

これを善導するには、少なくとも高級將校たるものは、よく時代思潮なるものを理解し、軍隊とデモクラシーとの調和点を発見し、露軍の如く遂に鉄瓶を破壊してしまったという状態にならないように予防しなくてはならない。試みに位置を変えて考えてみよう。例えば少しデモクラシーに感化された青年が入営して来たとしても、兵舎生活は乾燥無味で内務書の説く軍人の家庭のような暖かみは少しもない。

その上、下士官も將校も彼らを注意人物として、常に冷酷な眼をもつてその身辺を監視する。ややもすれば虐待を加えるような勢いを暗示する。

馬の取り扱いても然りであるが、傍に寄ればこれを敵視して箠でたたいた靴で蹴つたりする。これでは、馬はかみ、蹴る。結局近づくこともできない。猛々しい気性にならざるを得ない。